

きばたじんじゃ 木幡神社

国指定重要文化財 楼門・本殿

1 木幡神社の歩み

(1) 木幡神社の始まりと坂上田村麻呂

8世紀の末、桓武天皇は政治を引きしめようとして、延暦13(794)年、都を京都に移しました。こののち平安時代とよばれるようになりました。

坂上田村麻呂(758~811)が征夷大將軍に任命され、東北地方に兵を出して蝦夷えみしを討ち、朝廷の勢力を北上川の中流域までのぼしました。

下野国は蝦夷と接するところで、大和朝廷の權威が行き渡っていました。

木幡神社の由緒によると、坂上田村麻呂はこの地峯村で宿陣し、「功あらば一祠を建立せん」と日ごろ崇敬していた山城国許波多神社こはた(現京都府宇治市)に向かって戦勝を祈願しました。延暦14(795)年、戦に勝つての帰り道、ここに社を勧請したのが始まりとされています。

祭神は許波多神社と同じ天忍穗耳命(あめのおしほみのみこと)です。

※祭神は正式には正哉吾勝勝速日天忍穗耳命で天照大神の子(神話時代の神)

※坂上田村麻呂を顕彰する寺社が日本全国に分布している。東北地方で53か所(高橋崇・坂上田村麻呂・新稿版より)あるという。

※東北の雄、阿弋流為あてろいと母礼の降伏は、延暦21(802)年のことである。

(2) 平安・鎌倉武士による崇敬

10世紀の前半、下総の豪族平将門が乱をおこし、関東地方を抑えていましたが、下野の武士藤原秀郷らによってようやく鎮められました。秀郷は将門を討つ際に木幡神社に祈願したといわれています。

さらに、中央の藤原氏が衰え始めた11世紀の後半には、中央政府に対する反発や一族の内部争いから、前後2回にわたって乱をおこしました。(前九年の役1051~62、後三年の役1083~87)これにより、東国の武士を率いた源義家らによってしずめられました。その結果、関東地方の武士団と源氏の結びつきが強まりました。

源頼義・義家親子は、陸奥の阿倍貞任あべのさだとうを討つ際、木幡神社に祈願したと伝えられています。下野の国は戦力を整えて出発する前線基地であったといえます。

(3) 塩谷氏の氏神としての塩谷惣社大明神

平安時代の末頃、下野国の塩谷地方を治めたのは源義家の孫頼純よりずみです。

その後、宇都宮から養子として迎えられた塩谷朝業ともなりが川崎城を築き宇都宮一族の北の守りを固めたといわれています。

鎌倉時代から戦国時代の400年間にわたって、塩谷地方を支配する塩谷氏の惣社・鎮守の森として厚く尊ばれました。

鎌倉時代の御家人で歌人でもあった塩谷朝業の「信生法師集」には木幡神社と考えてもよいと思われる歌が残されています。

氏のやしろ（社）によみて奉り

あわれみよわれもあらしになりぬべしははちりはてしもりの木のもと

(4) 県内最古の神社建築と国の重要文化財「楼門・本殿」

木幡神社の楼門と本殿は、栃木県最古の神社建築で国の重要文化財に指定されています。昭和35年から36年（1960～1961）にかけて、大規模な解体修理が行われました。（雨もりの期間が長く腐食破損が進み、東西に傾斜していることなどが分かった。）建物の特徴から室町時代中頃の建造物ということがはっきりしましたが、棟札・墨書は発見されませんでした。

室町時代の中頃は、正系が絶えたあと家名を再興した塩谷孝綱（宇都宮氏17代成綱の子）の時代です。孝綱は永正11（1514）年に薬師如来立像（市指定文化財・現川崎反町薬師堂）を寄進しました。また、子の由綱は父の死から3年経った天文18（1549）年に御前原城内にお堂を建て地蔵を祭りました。現在、「はしか地蔵」と呼ばれ人々の信仰を受けています。このように信心深い武将であり、塩谷家の再興と塩谷惣社である木幡神社の再建に力を注いだのではないかと思われています。

(5) 木幡社日光大明神へ 江戸時代

天正18（1590）年、塩谷氏の滅亡により豊臣秀吉に社領を没収され、一時衰えたものの徳川時代に入って日光二荒山の祭神を合祀しました。

三代将軍家光の時代、慶安元（1648）年、当村内に御朱印地2百石が寄進されました。

日光山輪王寺の支配下のもと、「木幡社日光大明神」と称して神仏混合となり、楼門には仁王像が安置されました。

2 木幡神社の建造物と文化財

木幡神社は、下宮のある南の参道から明神鳥居をくぐり石段を上がると、本殿を中心に楼門・拝殿・幣殿・手水舎・社務所^{てみずや}などが配されています。

丹塗（朱塗）の明神鳥居には大きな注連縄がかけられ、額東には「塩谷惣社大明神」の神額が掲げられています。

◆木幡神社の文化財

【国指定文化財】

- ①本殿 1 棟（昭和 25 年 8 月 29 日指定）
- ②楼門 1 棟（昭和 25 年 8 月 29 日指定）

【県指定文化財】

- ③木造金剛夜叉明王坐像（昭和 48 年 7 月 24 日指定）

【市指定文化財】

- ④神像 3 軀
- ⑤鉄灯籠 1 基
- ⑥陶製狛犬 1 対
- ⑦蟬錠 1 個
- ⑧神號奉額 1 面
- ⑨太々神楽
- ⑩和算扁額 1 面
- ⑪杉社叢 10 本



入母屋造りの楼門

鶴の翼を広げたような屋根の形が美しい。朱塗りの楼門で室町時代の特色があり、造作に手の込んだ素晴らしい門である。昔は茅葺きであったものを木羽葺きに変え、昭和 36 年に銅板葺きにしたものである。



拝殿

江戸時代に再建された拝殿では、奉納された和算扁額、安政年間の絵馬などを見ることができる。



ながれづくり
流造の本殿

三間社流造（棟より前方の屋根が、後方よりも長く反っている造り方）で、屋根の反り、柱の垂木の太さなどシンプルで調和のとれた美しい建物である。かえるまた 裏股の中の彫刻は、細部は損傷しているが室町時代の特色を持っている。けんぎよ 懸魚は左右に3つずつあって丁寧に建築されている。

祭礼

- 1月14日 厄除け大祭（どんど焼き、太々神楽）
- 4月15日 春季例大祭（太々神楽奉納）
- 10月 秋季例大祭（ひやくものぞろえ百物揃武者行列渡御）



太々神楽

木幡神社の太々神楽は、「宝暦六巳年（1756）当社太々神楽奏始り」とあり、日光より伝わったという。江戸時代以来、地区内の氏子によって奉納されてきた。

古事記などにある「天の岩戸」などの日本神話を伝統の音楽と舞にのせて表現する。舞は13座からなるが、舞に登場する神が36ということから36座とされている。矢板市指定無形民俗文化財である。